

きょうから

須賀川ガス社長

橋本 直子さん登場



きょうから須賀川市の須賀川ガス社長の橋本直子さん(37)が登場します。

橋本さんは、今年で創業66年目を迎える同社の3代目社長。モットーは「どうせやるなら笑顔でやろう」。海外経験も豊富で、ガス事業やガソリンスタンド、酒類小売業などのほか、太陽光発電などの新たな分野にも笑顔で取り組んでいます。

はしもと・なおこ 須賀川市出身。  
安積女子(現・安積黎明)高、立教大、  
英国UCL卒業。英国や中国など海外  
生活は約8年間。県中小企業審議会委  
員、県総合計画審議会委員を務める。

マイ  
ストーリー  
【4面】

# 変わらない使命がある

して東京へ卸した。終戦後福島に戻ってきた祖父は、明治・大正期の政治家、後藤新平も医学士時代を過ごした須賀川の公立岩瀬病院で事務局長を務めていたが、エネルギー需要の拡大を見据えプロパンガス販売を始め、その後ガソリンスタンド第一号店を開所した。インフラ事業を通じて地域の発展を志した祖父の功績は後に叙勲の栄に浴し、民間人としては最高の勲四等瑞宝章を受章することになった。先人の意思を受け継ぎ、現在須賀川ガスは「地域社会への奉仕」を社是にプロパンガス、ガソリンに灯油、そして電気という三つの柱を中心に、車検や保険、太陽光に蓄電池、酒スパーやフィットネスなど、県内23事業所を中心に東北や関東で事業を拡大している。目指しているのは「親切なガス屋さん」「困ったときに頼りになる地域の総合エネルギー企業」。生活に欠かせないインフラを通じて地域を支える「創業から今も、そしてこれからも、私たちの使命は変わらない。」

(聞き手 但野雅司)



勲四等瑞宝章受章謝恩会で祖父(左)に花束を手渡す私(右手前)

## 須賀川ガス社長 橋本 直子 (37) ①

私の祖父・橋本淳が須賀川ガスを創業してから、今年で66年となった。小さい頃は家の前にガソリンスタンドがあったので重い鉄の扉を開けて裏口から入り、スタップに遊んでもらったり、事務所でお絵描きをしたりした。夏になると須賀川町に家族全員でお墓参りに行き、帰りにスタンドでアイスを買ってもらった。祖父の叔父で育ての親にあたる釘本衛雄は浪江町出身で、早稲田大高等科で学び、福島民友新聞社副社長を経て、1986年に福島新聞社社長を務めた人物だ。福島県議に4度選出、議長を2期務め、福島にとって大事なインフラ事業・只見川電源開発にも関わったと聞いている。衆院議員として国政に携わり、終戦後の45年には第4代福島市長として、翌46年には福島商工会議所第10代会頭として、福島の発展に尽力した。

釘本氏の背中を見て育った祖父は、須賀川ガスの前身である上野石材で石の一大産地・須賀川で石を切り出し、インフラ事業の需要拡大を背景に阿武隈川を利用して建築用材と

マイストーリー

human



# UCLは甘くなかった

井上馨、五代友厚や夏目漱石なども学んだ。偉大な同窓生たち…。入学通知書に感激したのはつかの間、UCLでの大学院生活は、今までと一変、修行のような日々となった。

多様な経歴を持つ学生がいた。因費留学のカザフスタンの学生、飛び級で進学してきた20歳のアメリカの女子学生、修士号を既に複数持つタイの学生など、優秀な学生ばかり。課題を毎月1本、ペーパーで提出、英語で論文を読むのも書くのも発表するのも、私は付いていくのがやっと。いわゆる落第ごぼれだった。家と図書館と教室の往復、論文を読む毎日。

そんな時、フィールドワークでアフリカのウガンダに行く機会を得た。首都カンパラから南西にあるムプロ湖へ向かう。地元漁師に湖で毎日何匹魚が捕れるのか、どこに納めているのかなど調査した。しかし、壮大な自然があっても生かされない観光資源、整わないインフラ、そして貧困。机上で学んできた開発学だったが、改めて「地域が豊かになる開発」をしないとと思った。(聞き手 但野雅司)



UCLの卒業式にてクラスメートと一緒に(左端が私)

## 須賀川ガス社長 橋本 直子 ②

ロンドンで過ごした8年間は私の宝物だ。きっかけは立教大3年の1月。卒業に必要な単位をほぼ取り終え、ふと思い立って前から行きたかったイギリスに行くことにした。両親に渡英の詳細を書いたプレゼン資料を提出し、費用と目的を説明、協力してくれたいと訴えたところ、父は「いいよ」と返事一つで送り出してくれた。

ロンドンでは語学学校に行き、いろいろな国の生徒と友達になり、週末はコッツウォルズ地方やエディンバラ、ユーロスターでフランスやベルギーなどに行ったりもした。どんな生活は最高だった。大学で観光学を学んだことで、私は土地土地の魅力を発掘し発信する開発の仕事を目指していた。そこで、UCL(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)で開発学の修士に進むことにした。

自由主義・平等主義の大学として有名なUCLと日本との関わりは深く、明治維新に大きく影響を与えた長州ファイブの伊藤博文や

マイストーリー

human



# 思わぬ場所に縁がある

ン芸術大学を卒業した留学生も多く、春夏ロレクションについて、素材やコンセプトなど私の知らないことを教えてくれた。

当時の会長ベルナル・アルノー氏は、ルイ・ヴィトンを筆頭に多くの高級ブランドを傘下に入れ、一大ファッション王国を築いていた。一度彼が息子を連れて訪問したことがあった。細身でも迫力ある静かな紳士が、その場に緊張感が走ったのを覚えている。

毎年恒例のクリスマスパーティーは、おしゃれなレストランを貸し切って開催した。「どんな靴」「何を着ていく」。そんな話題で盛り上がった。

パーティー当日は飲んで、踊って、話して。いろいろな考えや文化を持つ人たちが出会い、交わる瞬間が、こんなにも楽しいなんて。思いもよらない考えや、新しい価値観に多くの刺激を受けた。

常識の反対語は、非常識ではないのだ。一人一人の個性が光る最高の職場と仲間に出会えたことに、今も心から感謝している。

(聞き手 但野雅司)



スローンストリートの仲間たちと。ロンドンにて

## 須賀川ガス社長 橋本 直子 ③

大学院修了と同時期、リーマン・ショックが起きた。

開発に携わる仕事を考えていたが、1カ月には300社近くに履歴書を送付しても返事すらない日々が続いた。求人も少なく就職できずにいた。

そんな日々の中、気晴らしにネットで新作バッグを見ていた時、ルイ・ヴィトンのサイトで人事のタグを見つけた。ひとまず履歴書を送ったら、面接に呼ばれ採用。暗闇の長いトンネルの中で一筋の光明を見る思いだった。ひょんなことから英国ルイ・ヴィトンでお世話になることになった。

配属先はロンドンの中でも高級ショッピングストリートとして知られるスローンストリート。日本人は私一人、同僚はブラジル人やエクアドル人、モロッコ人など、国籍や年齢はもとよりの、ジェンダーも、大学院の時以上に多様だった。

ファッション業界の、ファッションを愛する人たちの熱量は、とにかくすごい。ロンドン

マイストーリー

human



# 異常が通常になる前に

島にたどり着くことができたという。

私は、チンさんに何かあっては大変だと、一番最初に日本を出る便を手配し、成田空港の片隅で便を待つことにした。余震が続く。眠れない。電話がつかまらない。福島は大丈夫だろうか。長い長い夜だった。

この震災をきっかけに、私は福島に戻ることになった。日本が、福島が、大変なことになっているのだ。ロンドンは去り難かったが、ふるさとのために何かをしたかった。

日本はなんと災害が多い国なのだろう。ここ数年を見ても、熊本地震、西日本豪雨など各地の被害は甚大だ。そして昨年10月の東日本台風、須賀川ガスも県内23事業所のうち本社を含む4カ所が大規模半壊し、高いところでは1メートル以上の浸水被害があった。

進む環境破壊、破壊されるオゾン層、年々更新される気温や降水量。異常気象が通常になりつつある。地球が悲鳴を上げている。私たちが、変わらなければいけない。

(聞き手 但野雅司)



昨年の東日本台風の翌朝、須賀川市の卸団地にある須賀川ガス屋上からの光景

## 須賀川ガス社長 橋本 直子 ④

2011年3月11日、私は成田空港にいた。当時まだロンドンで生活しており、休暇で日本に戻っていた。

留学以来仲良しの中国の友達チンさんと一緒に地元福島の鶴ヶ城や大内宿を巡り、欠々の日本をエンジョイ。2週間ばかりの休暇を終え、成田空港で父と合流した。チンさんを中国へ見送ったあとと私は一緒にベトナムに行く予定だった。

出発前にお茶を飲んでいたらその時、ものすごい大きな揺れが走った。天井からパラパラと物が落ちてきて、空港スタッフが避難誘導を始めた。とんでもないことが起きている！そう思った。一瞬つながった母との電話で福島も相当大きな揺れだったと知り、父は空港の前に止まっていたタクシーをつかまえて、すさまじく福島に飛んで帰った。

タクシーの運転さんに行先を福島と伝えると驚いたようだったが「うちのガス屋。オートガスタンドに燃料はあるから大丈夫」と出発。一般道を使い、真夜中になんとか福

マイストーリー

human



# 変化の時がやってきた

須賀川ガス社長 橋本 直子 ⑤



2012年1月、当社第1号となる蒲之沢太陽光発電所(10キロワット)が完成した

須賀川ガスは、2011年の東日本大震災をきっかけに電力事業へ参入した。会社の歴史を振り返ると、実にさまざまなお仕事を始めては終わらざるスクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきた。宝石販売から薬局、コンビニやファッションショップなど。時代の流れをともない、私たち自身も変化していかなければならない。震災は、変化の大きなきっかけとなった。

社長だった父は、震災直後に太陽光発電事業を構想、同年12月には自社の所有地で第1号発電所の建設に着工した。太陽光発電については当時、まだ買い取り価格も決まっておらず、設備も高額。事業が成り立つのかどうか理解している人も少なかった。

そんな中で10キロワットの太陽光発電を自捐す「ニアドバリュー」を掲げ、社内各部門から人を集め、発電事業に乗り出した。

発電所が完成した。いよいよハンマーで打ったパネルの角度を模索したり、試行錯誤の末に完成した。設備規模わずか10キロワットの小さな発電所。ここから社員一丸となって規模を拡大していった。

電気に関する資格を学び、社員の半分以上が有資格者となった。設計から施工、管理までの内製化にも成功。5月現在、県内の太陽光発電所は100カ所を超え、ついに目標の10キロワットを達成することができた。

当時の売上額の半分以上の借入れをし、スピーディーに体制を構築した父の決断力と実行力には、経営者として頭が下がる。

再生可能エネルギーの可能性は無限だ。次の世代にバトンをつなぐ時、私も父のようになり「あの時これをやっていたらよかった」と言われるような決断をしたい。

(聞き手 但野雅司)

マイストーリー

human

# 世界一小さな電力会社

須賀川ガス社長 橋本 直子 ⑥



昨年10月の第51回大感謝祭。東日本台風の被災を乗り越えて、お客さまへの感謝を込めて開催したスタッフと共に

私のビジネスの基本は、大学時代の「田代ゼミ」で培われた。

田代泰久先生は一橋大卒業後、日本政策投資銀行を経てハーバード大などで学んだ。ゼミの受講生にビジネスプランを作らせ、発表させるという、当時としては珍しい取り組みをしていた。

私のチームのビジネスプランは、旅館SPAングという会社。小さな空き家を旅館に改装し、外国人観光客を取り込むとする。今でいう空き家のリノベーションやゲストハウスの運営を考えた。

立地や市場規模などを調べて話し合い、先生の部屋に持って行く。しかし、先生からは「この数字の根拠は」などの的確な駄目出し。プランを練り直し、再び先生の部屋のドアをノックする。

売のきる仕組みがあると聞き、早速東京の会社を訪れた。

その日は偶然にも3月11日。震災があった日だ。新しい展開があるかもと、期待を胸に打ち合わせに臨んだのだ。

案内された部屋にはモニターが並び、気象予報士らがエリアごとの天気と発電量を予測していた。「各地の需要を24時間管理した上で電気を供給しています」と説明を受けた時、田代ゼミの学んだ経験から「これは可能性がある事業。私にもできるはず」と直感した。

当時社長だった父は「電力小売の単体で赤字でもいいから」と後押ししてくれた。2014年12月には第1号のお客さまと契約、翌年4月に電気の供給を開始した。

その時のお客さまは9件。世界で一番小さな電力会社となった。今は事業開始から丸5年、福島県を中心に1万件のお客さまに電気を届けている。(聞き手 但野雅司)

\*次回は18日に掲載します。

マイストーリー

human

# 環境先進国の姿に学ぶ



ハイデルベルクのシュタットベルケにて、ドイツ視察のメンバーたちと

須賀川ガス社長 橋本 直子 7

クを構築していた。安定した電力事業を軸に、雇用が生まれ、人が育つ。新電力の役割と方向性が、おぼろげながら見えてきたような気がした。

フライブルクのエコタウン・ヴォーバン地区では、パッシブハウスという省エネ住宅を見学した。断熱材や高性能窓を導入することで、効率的に熱を利用。足りないエネルギーは、屋根の太陽光発電などの再生可能エネルギーで賄っていた。

メルケル首相は、2050年までに電力の80%を再生可能エネルギーで賄う目標を掲げる。カラフルな住宅と確かな省エネ技術。緑に囲まれたこのヴォーバン地区で人々は共存している。エコな取り組みを生活の一部と認識し、低炭素な環境を遊ぶ住民の意識の高さにも驚く。私がドイツで感じたのは「低炭素なまじくくは、誰でもない、そこに住む人が創り上げるものなのだ」ということだった。

(聞き手 但野雅司)

電力小売事業を始めた2015年の夏、環境先進国のドイツを視察した。各地で新電力事業に取り組み仲間たちと共に、フランクフルトやハイデルベルクなどの都市を巡った。目的は、各地の「シュタットベルケ」を訪ねることだった。

シュタットベルケとは、ガスや電気、水道など、地域に公益性の高い生活インフラを提供する公社だ。ドイツは1998年、世界に先駆けて電気の全面小売り自由化に踏み切ったことから、当時に1400を超える公社が活動していた。

電力事業に乗り出した須賀川ガスにとって「何か将来のヒントをつかむことができれば」と期待した。

運営形態は、地元自治体の100%出資、自治体と民間企業が共同運営しているものなどさまざまで、事業規模も顧客数が数千件規模から百万件規模まで幅広かった。

しかし、現地で働く人に話を聞いてみると、一つの共通点が見えてきた。彼らは、大手電力会社にひけを取ることなく、地元顔が見えるサービスを提供できることを強みとし、独自のネットワーク

# マイストーリー

human

# 圧倒的なパワー感じた



中国での日々は多忙だったが、休日にはきちんと楽しんだ。大連の公園「星海広場」での一コマ

須賀川ガス社長 橋本 直子 8

飯時、毎日の変化が激しかった。シェアリングエコノミーがうたわれて久しいが、ある朝、寝坊して急いでタクシーをつかまえて学校に向かう途中、運転手が同じ方面に行きたいと歩道で手を挙げるお客を勝手に相乗りさせ、学校からほど遠いところで降ろされ遅刻した、なんてこともあった。違った意味で先取りしている。

人の多さもすごかった。日本では少子高齢化による人手不足が深刻だが、上海の美容院で一人が私の髪の毛を束ね、もう一人がカットし、別の一人が後で立っているのを鏡越しに見て「13億。人が多すぎて、それだけでパワーだ」と思った。

重慶の友人は地元最大手の建設会社を経営し、一族の結束は固く、教育にも熱心で、子どもを欧米のボーディングスクールに留学させ、帰国後はアジア各地に送る事業を拡大させていた。広がる中華圏ネットワーク。アジアを席巻する彼らが、間違えなく成長の鍵を握っていると思った。(聞き手 但野雅司)

太陽光発電事業に参入するにあたり、父はロンドンから帰国したばかりの私を中国の大連に送った。

第2外国語が中国語で上海の復旦大学に短期留学したり、中国や台湾の留学生とは仲良しだった。中国は身近な存在だった。

道徳の時間に読んだ荘子や孫子の話が面白かったこともあるが、何より私を奮起させたのはアジアの友人らにとって中国語はもちろん、日本語や英語を話せるのが当然だったこと。これから世界で仕事ができるように、私も勉強しなくてはと思った。

大連での生活は1年ほど続き、午前中に大連外国語大学で学び、午後は現地で太陽光パネルの会社や、太陽光発電に欠かせないパワコンディショナーの工場を訪問して情報を収集した。2012年当時の中国はGDP成長率が8%前後で、まさに右肩上がりの経済成長。なにかできるという前向きな雰囲気があった。先週カフェのあった場所にきょうは新しいパン屋が、なんていうのは日常茶

# マイストーリー

human

# 地域の宝 もっと身近に



CWA Jの60周年記念版画展にて。須賀川商工会議所の副会頭として父 @も同行してくれた

## 須賀川ガス社長 橋本 直子 9

マイストーリー

業に慣れてもいい。子どもが地域に関わる思いは、地元愛を育み、伝統文化や歴史を継承する上、とても大切な事だと思う。

2016年には、教育と文化交流を支援し、日本初の子留学生・会津の大山捨松や津田梅子との関わりも深い、社団法人CWA Jの現代版画展に縁あって須賀川の子どもの版画を展示していただいた。

米国ボストンから車で約2時間、ケープコッドの南西にある港町・ファルマスで行われたCWA J 60周年記念展示会では、たくさんの現代版画家の作品が展示された会場の一角に、須賀川の子どもの作品が飾られ、青年部のメンバーが作った巫欧堂田舎を紹介するビデオが流れ、福島の復興が紹介された。

後に地元紙ボストン・グローブにも掲載され、現地の人々から「福島の子どもの作品に元気をもらった」と温かいメッセージもいただいた。本当に素晴らしい経験だった。

(聞き手 但野雅司)

ロンドンから福島に戻ってほごなく、私は須賀川商工会議所青年部に入った。当時社長の父が同会議所の副会頭、事務の母は女性会に所属していた縁もあった。

特撮の神様・円谷英一氏の出身地でウルトラマンのイメージが強い須賀川だが、日本三大火祭りに数えられる松明あかし、釈迦堂川花火大会、きりり天王祭など、伝統的な行事がたくさんある。青年部の仲間と一緒にその企画運営に携わることが、地元歴史や文化をより深く学ぶことができた。

私自身子どもの頃、地域のお祭りをとても楽しみにしていて、毎年7月のきりり天王祭では祖母が新調してくれた浴衣を母に着せてもらい、キュウリをお供えしに行った。

青年部では、次代を担う子どもたちに地域の歴史や文化を知ってもらう活動の一つとして、北斎なども影響を与えたという須賀川出身の偉人、銅版画家巫欧堂田舎にちなんで版画展を主催している。市内小中学生に授業の一環として作品を作ってもらい、過去の偉

human

# 海外から美しいエール



福島の素材を利用してチュウ氏が作ってくれた靴。6足見つけたらいいことがあるかも？

## 須賀川ガス社長 橋本 直子 10

マイストーリー

「福島が世界へ Creativity Through Skills」という演題でチュウ氏は彼の幼少期から故ダイアナ妃の靴を作る靴職人として大切にしていたことなどを話し、若手アーティストにエールを送った。

当時まだ世界でも国内でも福島の安全に対する認識に差がある中、「福島の食べ物はいい、本場に素晴らしい場所」と発信してくれたこともありなかった。

この講演の様子は、彼が作った6足の靴とともにAFP通信を通じて世界中に配信。イベント後、東北経済産業局、福島県、川俣町、会津若松市、須賀川市に贈られた。名付けて「ドラゴンボール大作戦」。ぜひ探しに出掛けてみてね。

(聞き手 但野雅司)

震災からの3年、震災と津波、原発事故、風評被害から立ち上がりとう県内各地で復興に向けさまざまな取り組みが始まっていた。

福島市の土湯温泉では、芸術家を招聘し滞在中に作品をつくってもらい「土湯アラウンドアートフェスティバル」を開催しており、私もさっそく行ってみた。廃業になった温泉宿や空き地を利用し、若手アーティストの作品が並んでいる。地元の人たちの前向きな取り組みに励まされた。

同行した父が「福島の花見山はきれいだからたくさん画家を呼んで絵を描いてもらい、それを展示したらどうか」と言った。それをヒントに誰か招待できるか考えてみた。思い浮かんだのがロンドンつながりの世界的靴職人ジミー・チュウ氏だった。

当時マレーシアにいたチュウ氏に会いに行き、福島の名産品の会津木綿や川俣シルク、漆器などを利用して靴を作ってくれようとお願いをした。彼は快く承諾してくれた。

2014年4月18日、福島市のホテル辰巳屋でイベントを開催。須賀川商工会議所青年部や関係者らの力添えもあり、当時の内堀雅雄副知事らもイベントに来た。

human

